

2012年7月29日 マタイ 4:18-23 「わたしについて来なさい」

「わたしについて来なさい」とのイエス様は私たちに呼びかけてくださいます。これは私とともに働こうという呼びかけです。イエス様は、この世界を神の国へと作り直すために来てくださった救い主ですが、その救いの御業を一人で進めていかれるわけではありません。主はご自身の働きに、弟子たちを、また私たちを参加させてくださって、用いてくださるのです。私たちの能力の無さや、不信仰にもかかわらず、その私たちを必要としてくださって、神の国の実現のために共にいこう、共に働こうと招いてくださるのです。

「わたしについて来なさい」実に頼もしい言葉です。以前、本屋さんでたまたま目にして立ち読みをしたのですが、司馬遼太郎さんが子どもたちのためのメッセージを短くまとめている本がある。結局購入しなかったのですが、非常に印象深く、買っておけばよかったと後悔している。今度またどこかで見つけたら買いたい。その本の中に、古来日本では、頼もしさということが大切にされてきたということが書かれていた。頼もしい人になってくださいと。そして頼もしさとは、自分に厳しく、他人にやさしいということだとも書いてあった。いたわりという感情をもち、人の痛みを感じることのできる人。そういう頼もしい人に、人は魅力を覚える。そんな頼もしさということを感じるたびに、いつもイエス様のことが心に浮かぶ。私たちは福音書を読み進めていく中で、いつもそういう頼もしい方としてのイエス様に会うことができる。

弟子たちは、この方がいっしょにいてくださるだけで、心が安らいだことだろうと思う。満たされていたことだろう。この人といれば、どこにでも行ける。どんなピンチも乗り越えることができる。そして、昨日までの自分とは違う、新しい自分になれる、新しい世界に入っていくことができる。と、ワクワクして期待していたことだろうと思う。私は、皆さんにもそういう思いを味わっていただきたいと願って、このマタイ福音書の解き明かしをしています。頼もしい方イエス様が、私たちとも共にいてくださるのです。この方は、羊の命を全責任をもって守り導き、必ず憩いの水際まで連れて行ってくださる、頼もしい羊飼いです。私たちの痛みを知ってくださり、私たち以上に私たちのために祈ってくださる方です。そんな頼もしい方イエスが、共に歩んでくださる。そしてそんな頼もしい方イエスが「わたしについて来なさい」と、今、私たちに呼びかけておられます。

そういうわけで、今日は「わたしについて来なさい」との、この頼もしい呼びかけに聞きたいわけですが、今日の記事の構造というのはとてもシンプルになっています。ここでは二組の兄弟が主の弟子となるのですが、ほとんど同じパターンの繰り返しとっていい。両者ともに、まずイエス様がごらんになるところから始まります。「18 二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをごらんになって」「21 別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、船の中で網の手入れをしているのをごらんになると」。そして、仕事をしているそれぞれの兄弟に、主が呼びかけられま

す。ペトロとアンデレに対しては「わたしについて来なさい、人間をとる漁師にしよう」、ヤコブとヨハネに対しては「彼らをお呼びになった」とあるだけですが、ここでの呼ぶとは、ついてくるようにと呼びかけることを意味しますから、同じです。そして、その呼びかけを受けたペトロとアンデレは「すぐに網を捨てて従った」ヤコブとヨハネも「すぐに、船と父親とを残してイエスに従った」残してとあるのは、捨ててと同じ言葉ですので、ほぼ同じことが繰り返されていることが分かる。

ですから、今日の記事を要約するなら、イエスが二組の兄弟をご覧になり、呼びかけた、すると彼らはそれまでの人生を捨てて、イエスに従った。これだけのこと。実にシンプル。あとは何も書いていない。ペトロやアンデレたちの、決断に至るまでの心の動きなどは何も書いていない。私たちは想像をふくらませます。こういう決断に至るまでどういうドラマがあったのだろうか。実際ルカ福音書には、この漁師たちがイエスの力に気づかされるという場面が記録されている。一晩中漁をしたけどだめだった。でもイエスが、もう一回やってみろと言うので、しぶしぶやってみると驚くばかりの大漁。この出来事によって、信仰の決断が促される。そういうことが実際はあった。でも、マタイ福音書にはそういうことは何も書かれていない。著者であるマタイは、そういうことには関心がない。それは、そういう弟子たちの心の動きを伝えたいわけではないということです。弟子たちは色々と迷いながらも、最終的にはすべてを捨ててイエスに従ったというのが実際のいきさつであるわけですが、そういう彼らの信仰的決断に注目させることがこのテキストの目的ではないのです。

そうではなくて、マタイが伝えようとしているのは、イエスがこの世界に神の国を作り直すために行動を始められたときに、ただちに弟子が生み出されたということです。彼らの決断がどうのこうのではない。むしろ、彼らはいやおうなしに、イエスの圧倒的な招きにただ巻き込まれていく。イエスが弟子たちを生み出されるのです。それはちょうど、あの天地創造の時と同じであります。神が、原初の混沌に秩序を与えて、ご自分の喜びのために世界と人間を生み出そうと決意される。そうして「光あれ」と言葉が発せられたなら、ただちに光が生じて、世界が動き出したのだと創世記は伝えています。それと同じことが、今このイエスの働きのはじまりにおいて起こっている。イエスがごらんになり、呼びかけられた、するとすぐに弟子たちは網や船を捨ててイエスに従ったというシンプルさは、神が光あれと言われると、光が生まれたというシンプルさに通じるのです。なぜなら、この弟子たちの呼び出しは、世界の再創造の始まりだからです。あの天地創造の時に、神は絶対的な決意によって世界を生み出されたように、今、墮落した世界を作り直すという再創造の始まりにおいて、イエスもまた絶対的な決意によって、新しい人間を作り出されます。そしてこの新しい人間たちと共に、世界の作り直しをここからはじめていかれます。今日の記事に記されているのは、そんな世界の再創造の始まりとしての、新しい人間の創造です。

そして、その新しい人間の創造は、イエスが私たちをご覧になるところからいつも始まります。ご覧になる、すなわち見る。イエスは何を見ておられたのか。先週木曜日に第二回

目の聖書に遊ぶ会が開催されました。8名の兄弟姉妹が集まって、たった2節の記事から深く御言葉を味わったのですが、そこでも話題になったのは、この「見る」ということ。聖書に遊ぶ会でも、今同じように弟子たちの召命の記事をヨハネ福音書から学んでいます。そちらでも同じように、イエス様がペトロやアンデレを見つめておられたという記録がある。では何を見ておられたのか。彼らの弟子としての素養を見極められたという意見があった、もちろんそういうことはあるでしょう。でもそれだけを見ておられたならば、決してイエス様は、彼らを弟子として選びはしなかったことでしょう。彼らは決してイエスの弟子にはふさわしくない者たちでした。私たちは、福音書を通して、ペトロやヨハネ、ヤコブといった弟子たちの、体たらくをよく知ることができます。彼らの失敗を、裏切りと挫折を知ることができます。イエス様はそういう彼らの本性を見ておられないわけがない。すべてを見通すイエスの目には、そんな彼らの罪深い本性が見えるのです。しかし、それでもイエス様は、彼らを弟子として選ばれました。それは、イエス様が、彼らの未来をも見ておられたからです。彼らの過去や現在を見るならば、決して弟子にはふさわしくない。しかしイエス様は、彼らの未来をも見ておられます。それは人間の漁師となる未来です。そしてその未来は、彼らが自分の努力で手に入れる未来ではありません。イエス様が作り出してくださる未来です。

イエス様は言われました「わたしについて来なさい。人間を取る漁師にしよう。」漁師にならなさいではないのです、人間をとる漁師にしよう、私がそうしてあげようということです。この文章の主語はイエス様です。イエス様ご自身が、そのようにすると言っておられるのです。そして実際そのとおりに、イエス様は彼らを育て、訓練し、成長を与えてくださいました。残念ながらこの弟子たちは、イエス様の十字架での処刑という現実を目の当たりにして、師を裏切り逃げ出したという惨めな裏切りも聖書には隠さずに記されています。しかし、やがてイエス様がその十字架の死から、復活の命によみがえられた後、その彼らを赦し、そしてご自分の霊を注いで、彼らを立ち上がらせてくださって、世界の果てまでの宣教の旅に送り出されます。その後の彼らは、まるで別人のように、新しい人間として、この世界に神の栄光をあらわしはじめます。もう何物にも臆することなく、イエスの愛を確信して、神の国を広げていくのです。失われた罪人たちを、次々とすなどって、神との健やかな関係へと取り戻していく。そういう人間をとる漁師として新しく生まれ変わるのです。そんな彼らの未来が、使徒言行録などにはっきりと証言されています。イエス様が見ておられるのは、そんな弟子たちの未来です。ご自分がこれから生み出していかれる、新しい人間の未来です。

ペトロやアンデレたちは、そんな、イエス様が示してくださる未来に、自分の身をゆだねたのでした。それがイエスに従うということです。それは、自分の未来を自分で決めずに、イエスが示してくださった未来にこそ、自分の本当の姿があると信じることです。イエス様はその世界へとペトロやアンデレたちを招かれました。そしてそれは彼らだけでなく、彼らに代表される、すべての信仰者に与えられている招きです。イエスは、私という人物について書かれた本を、最後のページまで読み通しておられます。しかも、あたたかい好意をもって読んでいて

くださいます。そこには何が書いてあるのでしょうか。そこには、わたしが思っている以上に、はるかに素晴らしい物語が描かれているのです。私が今まで聞いたこともない、美しい言葉がつづられているのです。それは、イエス様が書き込んでくださる言葉です。イエス様は、私と言う本に、考えたこともなかったような素晴らしい物語を書き込んでくださる方です。そんなイエス様に身をゆだねるのです。イエスの見ておられる、わたしたちの未来を信じるのです。それが、イエスに従うということです。

そして今日の記事から示されることは、イエス様は私たち一人一人に、人間をとる漁師としての未来を用意されているということです。この未来を信じるのです。人間をとる漁師になるということ、それはただ単に職務としての伝道者や牧師になるということにとどまらないと私は考えます。これはキリストにつながる者たちすべてに与えられる、新しい人間のかまえであります。それは、隣人のために生き、人を生かす人になるということです。

人間をとる、この言葉は決していいイメージばかりではないと思います。一文字変えて、人気をとるとすれば、途端にいやらしい響きになります。選挙活動の際の政治家のこびへつらいが思い出されます。ファンの前でだけ笑顔をふりまくアイドルのことが思い出されます。自分の利益のために、隣人を利用し、コントロールしようとする罪深さがそこには垣間見えます。そこまで極端ではないにしても、でも私たちというのは誰もが本来、そのようにして隣人を自分のために利用しようとする罪人です。この人と付き合っておくとうまみがある、メリットがある、そう思うからこそその関係を大切にします。宝くじがあたると途端に友達が増えるなんて聞きますが、悲しいかな、誰もがそのようにして、自分のメリットのために人とつながろうとする、そういう意地汚さから逃れられないのです。しかし、イエスが示される新しい人間の姿はそうではない。人間をとる漁師になる。この「とる」は、殺すためにではなく生かすためにとらえるということです。私のメリットのために利用して殺すのではなく、隣人のメリットのために、隣人を生かすため、その人の人生に神のすばらしさが表れるようにと願って、福音の真理をもって語りかけるということです。無限の赦しと愛をもって、その人の人生に触れるということです。

それこそイエスが生み出そうとしておられる、新しい人間のかまえそのものなのです。そしてそれは、十字架の主イエス・キリストのありようそのものであります。イエス様とはまさに、人間を生かす方であります。この方は、仕えられるためにではなく仕えるために来たとされました。また多くの人の身代金として、自分の命をささげるために来たとされました。そしてまさにそのとおりに、身代わりの犠牲として十字架に死に、私たちの罪の責任をすべて引き受けてくださいました。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによってあなたがたが豊かになるためだったのです。」とパウロは言いました(Ⅱコリ 8:9)。私たちが、神のもとにある命の豊かさに到達することができるように、ご自分の命を使い尽くして、道を開いてくださったのがイエス様です。それゆえ私たちは、この方こそが真に「頼もしい方」とであると告白します。

このイエスのように変えられていく、それが人間をとる漁師になるということです。イエス様は言われました「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」。わたしについて来なさいと言われたのです。それは直訳すると、わたしの後ろについて来なさいとなります。わたしの後ろに、先に行くわたしの存在を見つめながら、私の歩む道を後ろからついて来なさいとの招きです。その道は、十字架の主の後を追って、自分の十字架を負う苦難の道でもあります。隣人を生かすために自分の命を用いるという道に、苦しみが伴わぬわけがありません。私たちが真にイエスの後ろについていくなれば、この世において、多くの痛みを伴うでしょう。悩み苦しむ人と関わり続けることは、まことに難しいことです。利用されるだけ利用されて、愛を裏切られることもあるでしょう。多くのささげものによって、自分の地上的幸福が大なり小なり減少して、代わりに地上的労苦が増していくことも否めません。しかし、イエス様は約束してくださいました。自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、わたしのために命を失う者はそれを得る。マタイ 16:24. わたしについて来たいものは、自分の十字架を背負ってわたしに従いなさい、との招きの後で、そのように約束してくださいましたのです。わたしのために命を失う者は、それを得る。わたしたちが、イエスの後ろについて行って、隣人を生かすために自分の命を用いるという道に生きるならば、かえって命を得る。その命とは、神の祝福の輝きに満ちた永遠の命であり、そこにこそ人間が本来到達するべき、真の人間性もまた満ち満ちているのです。

私という本の結末は、そんな光という光に満ちた永遠の命に至るのだと、イエス様は私たちの未来を示してくださっています。この未来に進んでいきましょう。特に若い方々に申し上げます。自分の未来を自分でみくびってはなりません。イエスの後ろについていく道において、皆さんの尊厳は輝きだし、地上的な喜びをはるかに凌駕する、神の喜びに満たされた人生が始まります。皆さん一人一人が、わたしについて来なさいとイエス様から選ばれ、招かれている、特別な存在なのです。そして齢を重ねられた方々にも申し上げます。皆さんにはもはや未来がないということは決してありえません。皆さんお一人お一人には、まだ自分でも知らない自分の物語が用意されています。イエス様が作り出してください、人間をとる漁師としての、新しい人間としてのあなたの物語が今日よりはじまります。それは、どんな物語でしょうか。与えられた病にも屈せず、死の恐れにも立ち向かい、神の命に生かされることの素晴らしさを家族や隣人に証しして、多くの人をキリストのもとへと招いた、堂々たる信仰者の物語が、ある人の本には書かれているのです。誰かが自分に対して犯した決して赦すことのできないような過ちを赦して、和解の手を差し伸べることで、キリストの無限の愛へと立ち返らせた愛の人の物語が、記されているのです。積み重ねてきた信仰人生の経験と財産をすべて用いて、これからの子どもたちのために、若者たちのために献身的に奉仕し、その背中で信仰の喜びを証ししていく、それによって教会の新しい未来を開いた頼もしい老人の物語が記されているのです。

「わたしについて来なさい」とイエス様は招いておられます。イエス様が私たちのために用意してくださっている未来へと進んでいきましょう。